



TITLE:

<書評>James R. O'shea, Wilfrid Sellars:
Naturalism with a Normative Turn (Key
Contemporary Thinkers)(Polity Press,2007,
vii+272p.)

AUTHOR(S):

田中, 凌

CITATION:

田中, 凌. <書評>James R. O'shea, Wilfrid Sellars: Naturalism with a Normative Turn (Key Contemporary Thinkers)(Polity Press,2007, vii+272p.). 哲学論叢 2013, 40: S17-S20

ISSUE DATE:

2013

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179502>

RIGHT:

James R. O'shea, Wilfrid Sellars:
Naturalism with a Normative Turn (Key Contemporary Thinkers) (Polity Press, 2007, vii+272p.)

田中凌

本書は、Polity Press により Key Contemporary Thinkers シリーズの一冊として刊行されたものである。このシリーズは、現代の思想家についての概説、入門を提供することを目的としている。

セラーズは、認識論、心の哲学、言語哲学、科学哲学、倫理学といった様々な分野での仕事を残しており、またその哲学は体系的である。本書はまずセラーズの哲学全体に見通しを与えることを目的とし、叙述のスタイルもそのような目的に適ったものであることを意図されている。第一章においてまず、セラーズが哲学の課題をどのようなものとみなし、どのようにアプローチすべきであるかと考えるのかについて、「明白な(manifest)イメージ」と「科学的(scientific)イメージ」との衝突という観点よりおおまかな見取り図が与えられる。第二章から第六章においては、要所でその見取り図に再度言及しながら、科学哲学、言語哲学、心の哲学および認識論という順で、各分野についてのセラーズの具体的な仕事が概観される。この順序は恣意的ではない。二つのイメージの衝突という問題は、究極的な実

在の描写については科学的イメージが明白なイメージに対して優位に立つというセラーズの主張、つまり彼の科学的实在論の主張がベースとなって初めて浮き上がってくるものである。また、「ジョーンズの神話」、「所与の神話批判」などに代表される彼の心の哲学および認識論上の主張であるが、セラーズはこれらに言語からアプローチするため、まず言語哲学がそれに先立って提示されていなければならない。最後の第七章では、倫理学という分野におけるセラーズの主張を扱うとともに、もう一度、より詳しく、包括的な見取り図が再提示される。

はじめに、第一章、第七章から、セラーズが哲学をどのようなプロジェクトと捉えていたかということについてオシェアの説明を見てみたい。まず上で言及された、明白なイメージと科学的イメージとの衝突という哲学が直面する問題は具体的にどのような事態なのか。先にそれぞれのイメージがどのようなものであるかを明らかにしておこう。ここでの「イメージ」という言葉遣いは、簡略に言って「概念の枠組み」のようなものであると、とりあえずは理解されてよい。明白なイメージとは、いわゆる伝統的な哲学が営まれてきたような、我々がよく馴染んでいる枠組みであり、そこにおいて人間は基礎的な一つの実体とみなされる。一方科学的イメージの下では、人間は基礎的な実体ではなく、究極的には基礎的な物質から構成される複雑な「もの」に過ぎない。前者において人間は概念的思考

をし、自発的に規範に従う存在だが、後者の下では人間もただ因果関係によって規定された存在にすぎない。二つのイメージにおいて描き出される「人間」の像はお互いに対立するように思われる。

このような二つのイメージの衝突をセラーズは哲学の直面する基本的な問題と捉える。ここでセラーズはどちらかのイメージ「だけが」正しいものであるとは考えない。衝突はしているものの、どちらのイメージにも一定の妥当性があるということを認め、この両者を統合した複眼的 (synoptic) 視野に近づくことが、セラーズにおける哲学の課題である。では具体的に、そのような複眼的視野はどのように獲得されるべきなのか。二つのイメージの関係はどのように捉えられるべきであるのか。

オシェアはこの課題に対してセラーズがとる姿勢を、「規範的転回を伴う自然主義 (naturalism with a normative turn)」と呼ぶ。それは「我々の最も深い哲学的困難を、規範と自然との、理由と因果的斉一性との間の複雑な諸関係についての問題にまでたどること」(p. 177) である。二つのイメージの間には哲学が解きほぐすべき複雑な関係が存在する。どちらかのイメージが他方へと「還元」されるのではないか、という問題についてオシェアは、明白なイメージは科学的イメージへと「因果的な面では還元可能だが、同時に論理的 (概念的) な面では還元不可能」(p. 21) と考えるのがセラーズの立場であると説明する。セラーズは科

学的实在論を取りながらも、明白なイメージの消去不可能性を主張する。つまり、人間が最終的には科学によって記述されるような、複雑な物理システムであるということを認めながらも、しかし同時に、規範的概念が非規範的概念に還元されるということは誤りである、と考える立場である。

このようにセラーズの基本的な立場が明確に表現されているという点で、まず本書は入門書として一定の役割を果たしていると評価することができる。セラーズの哲学を理解するためには、まず以上のような基本的な問題設定が理解されていることが何よりも重要であると考えられ、それを読者に提供することは入門書としての第一の役割であろう。

では、より具体的な議論についてオシェアの説明を以下で確認していこう。複眼的視野達成を目的とするセラーズの哲学の根底にある構造の一つをオシェアは「規範／自然メタ原理 (norm/nature meta-principle)」と呼ぶ。この原理の内容は「[規範的な]諸原理の採用は、[自然的な]行動の斉一性に反映される」(p. 50, 括弧内引用者) というものである。規範と自然、より広く言って明白なイメージと科学的なイメージとの間の橋渡しがこの原理によって意図されている。オシェアはこの原理を度々強調して説明を進めていく。この原理の内実を理解し、さらにそれがセラーズの議論の根底にあることを確認するために、以下ではセラーズによる言語の習得の説明について、この原

理を主軸としてオシェアが再構成したものを第四章から確認したい。そこでは規範と自然との間の関係が問題となる一つの典型的事例として、概念的能力を持たない子供がしだいにルールに従った言語の使用を習得するという過程が挙げられている。

まずオシェアは、セラーズが言語の運用を、ルールに従っていること、とみなしていることに言及することから説明を始める。セラーズは、言語運用を「言語入場的移行 (language entry transitions)」、「言語内的移行 (intra-linguistic transitions)」、「言語退場的移行 (language departure transitions)」という三区分からなる「パターンに支配された言語的行動 (pattern-governed linguistic behavior)」によって特徴づける。これらはそれぞれ順に、世界から言語へ (知覚)、言語から言語へ (推論)、言語から世界へ (意図) という、言語と世界についてありうる3つの関係を反映している。そしてセラーズはこれらの言語的行動が「パターンに支配されている」ということを、単なる自然的斉一性ではなく、ある意味で「ルールに従っている」こととして表現されるような、規範的事態であると捉える。したがって、セラーズにおいて言語を学ぶことは、端的に言ってそのルールを学ぶことである。

しかし言語習得以前の子供にとって、言語を介してこれらのルールを概念的に把握しそれに従うということは明らかに不可能である。ルールを学ぶためにすでにルールが理解されていなければならないというパ

ラドックスが一見してここにはあるように思われる。セラーズはこのパラドックスについて、ルールに「であるべき／するべき規則 (ought-to-be/ought-to-do rules)」という区別を導入し解消を試みる。この区別は手短かに言ってしまうと、それに従っているとみなされるために、主体によるルールの概念的把握が必要かどうかによるものである。後者は「意図的に」なされる「行為」のルールであり、「C という環境においては A すべし」といった形で定式化される。これに従う主体は概念的なルールの把握が求められる。それに対し前者は「行為」のルールではない。それに従っているとみなされるために概念的能力の有無は問われず、単に行動の一定のパターン、斉一性を示しているということだけが必要とされる。

この区別を踏まえれば、言語習得についての整合的な説明を与えることが可能である。子供が言語を学ぶことは、ought-to-be rules に従うように大人によって「訓練される」ことなのである。これはすでに確認したように、子供がルールを概念的に把握できることを必要としない。ここで必要とされるのは、子供にとっての母語の教師となる大人が、ought-to-do rules を概念的に把握し、そのルールを基準として、しかるべき環境においてしかるべき発話をもって反応すること (言語入場的移行の場合) を子供に訓練する、ということだけである。このような訓練は因果的プロセスとして記述することが出来るものであり、これを通じて、

子供に発話の斉一性を身につけさせることが可能である。この時子供は *ought-to-be rules* に従うようになったとみなされる。言語内的移行、言語退出的移行についても、同様の枠組みでの説明が可能である。

さて、上記のような言語学習の事例においては、オシェアの言う「規範／自然メタ原理」が議論の根底にあることが確認できる。「諸原理の採用」、つまり大人が *ought-to-do rules* を概念的に把握し、それに基づいて子供に訓練を施すということが、「行動の斉一性」、つまり *ought-to-be rules* に従っているとみなされるような、子供による発話の斉一性をもたらしている。子供の発話の斉一性は、自然的な因果性によって実現されるものではあるが、しかし大人の側での規範の概念的把握というものがあって、初めてもたらされるものでもある。このような、規範と自然との関係を明らかにする「規範／自然メタ原理」が、明白なイメージと科学的イメージとの関係を探り、複眼的視野の獲得を目標とするセラーズの哲学の一つの核であるとオシェアは説明する。

セラーズはここからさらに、言語についてのルールを明示的に表すためにはメタ言語を習得することが必要であるという観点から、大人の側が概念的に把握していなければならなかった *ought-to-do rules* の本性についても説明を与えているのだが、この点については本書ではあまり言及されていない。しかしながら、「規範／自然メタ原理」

がどのような形でセラーズの議論に表れているのか、ということはオシェアの記述で十分に明らかになっていると言っていいだろう。このように、セラーズの哲学において主張の根底にある構造が定式化され、それに引きつけて説明がなされるのが本書の特長のひとつである。ここで詳細を確認することはしないが、オシェアはさらにセラーズが言語の意味や志向性というものをどのように捉えるのか、ということについても、規範と自然との関係という観点から構造の定式化を行なっている。一見しただけではその目標が必ずしも判然としないセラーズの哲学を理解するにあたって、このようなアプローチは有効であると言える。

最後に本書でやや不十分だと思われるところを指摘しておく、言語の意味において実質的推論 (*material inference*) が果たす役割というものをセラーズは重視するが、その点に関する記述が少し不足しているのではないか、という点を挙げられるかもしれない。言語の規範性というものを、形式的推論を越えたより広い枠組みで捉えるセラーズの立場が見えにくく、この点については少し不満が残る。しかし、体系的なセラーズの哲学に見通しを与える本書のような入門書が近年出版されてきていることが、セラーズ研究にとって望ましい状況であることに間違いはないだろう。